

---

# ドッペル源さん

kaji

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドッペル源さん

### 【Nコード】

N2170G

### 【作者名】

kaji

### 【あらすじ】

俺こと源元治によく似た人が目撃されるようになった。俺はそいつが何なのか解明することにした。バトルあります！

**（前書き）**

楽しんでいただけると幸いです。

## ドッペルゲンガーとは

ドイツ語の「ドッペル（doppel）」は、英語の「ダブル（double）」に該当し、その存在は、自分と瓜二つではあるが、邪悪なものだという意味を含んでいる。

以上の意味から、自分の姿を第三者が違うところで見るとは、自分で違う自分を見る現象のことである。自ら自分の「ドッペルゲンガー」現象を体験した場合には、「その者の寿命が尽きる寸前の証」という民間伝承もあり、未確認ながら、数例あったということ、過去には恐れられていた現象でもある

Wikipediaより引用

<http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%89%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%B2%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%BC&amp;oldid=24481427>

俺こと源元春は困っていた。なぜか最近見覚えのない目撃情報を友達などから聞くからだ。

「スーパーでにんじんを真剣に選んでいたのを見たぞ」

「駅でストリートミュージシャンにお金をあげていたところをみたぞ。ブラボーって言ってた」

「コンビニでウーロン茶にするか麦茶にするか悩んでたのを見たぞ」などという目撃情報を最近よく耳にする。俺はそんなところには行っていないし、そんなこともやっていない。

「俺によく似ている人じゃないの？ ほらよく言っじゃない。この

世の中には同じ人間が23人はいるってさ」

「似ている人っていうかそのものの源さんにしか見えなかったんだけど、それと同じ人間はそんなにはいないからな」

どうやらよく似ているところか俺にしか見えないらしい。考えてもどうしようもないのでその時はそのものの俺によく似ているやつもいるんだなと訳の分からない答えを返してやった。

俺には夢遊病もないし、多重人格もない。はず。今の所そんなことは聞いていないからその通りなのだろうと思う。だったらなんなのだろうか。ネットで検索してみたらドッペルゲンガーという用語に引っかった。自分自身を見る体験らしい、そしてそれを本人が見たら死ぬらしい。俺はその俺自身とかいうやつを見ないように生活しようと思った。目撃情報が在ったところには近づかない。外に出る時はできるだけ俯き加減で歩いた。そうすることでできるだけドッペルゲンガーを見ないようにする努力をした。

ある日俺はいつものように俯き加減に歩いていたら誰かに肩を叩かれた。誰だろうと振り向いたら俺によく似た人だった。

「どちら様ですか？」

思わず俺は聞いてしまった。それほどんばってしまったからだ。

「俺か、俺はお前だよ」

しかも、やつは喋りだしたのだ。俺ってこんな喋り方するんだ。

「って。なんで声かけてくるんだ。お前は！俺の努力はどうするんだ。どう責任取ってくれる」

俺はとりあえず逆切れしてみた。

「どうも何も俺は俺だ。俺は俺の思う通りに行動するだけだ」

全く俺俺うるさいやつだ。

「なんで俺に声をかけてきた。俺の今の状態を見たら分かるだろう。俺はお前を見ないように行動してきたのによりにもよって声をかけてくるだなんてマナー違反じゃないのか？」

論点はずれてきたような気もするがとにかく攻めで行ってみた。

「それは悪かった。なんだかここで声をかけたら面白い気がしたの

でつい声をかけてしまった。悪い悪い」

とても悪いとは思ってなさそうだったが、俺はかねてから言おうと思っただけのことと言った。

「まあそれは今さらどうにもならないからもういい。それよりもお前勝手な行動をするな。お前が好き勝手に行動しているせいで俺はいい迷惑だ。今後目立った行動を慎むようにしろ。外出するときはサングラスにマスクを掛ける。いいな」

俺が強めに要求するともう一人の俺はわかったと言ってかすかに頷いた。

「悪いが行く所があるんでじゃあな」

そう言うともう一人の俺はどこかに走って消えていった。いったいなんだったんだろうか。願うならば一生消えてくれればいいものをと俺はその時神に祈った。

俺がもう一人の俺に会った時以来から目撃情報は多発するようになった。俺は死ぬようなことはなかったがこれには大分弱っていた。「お前パチンコ屋で働いてたよな」

「元治、寿司屋で寿司握ってたけどお前んちって寿司屋だった？」

「源さんジャイアンツで先発やってたの見たけどお前ってプロだったの？」

「源さん国会中継に出てましたけどいつから国会議員になったんですか？」

「源ちゃんコンビニでいけない本読んでたけどダメだよ」

などと明らかに俺じゃない目撃情報が多発するようになった。慎むどころか悪化していた。しかしどんな方法を使ってそんなことができるんだ。よく聞いて情報を整理してみると同じ時間帯の話もあった。これから考えるともう一人の俺はどうやら何人かいるかもしれないと思った。俺はもうこれ以上好き勝手はさせてもらえないと思い、目撃情報が一番多かった俺に似ている人がインストラクターをしているという所に向かった。やつは容易に見つかった。前面ガラスぱりの教室で外から授業風景が見えたからだ。やつはなんだかよくわ

からないホットヨガのようなものを教えていた。俺はやつが授業を終えるまで建物の影で待ち構えることにした。

やつはほどなくして外に出てきた。俺は後ろから声をかけた。

「おい！！ 偽者」

やつはこちらを向いた。やはり俺にそっくりだった。

「……」

やつは喋らなかった。前のやつとは少し雰囲気が違うような気がした。

「お前何がしたいんだ。勝手なことをするなって言っただじやないか。これ以上勝手なことをするとただじゃおかないからな。この偽者！」俺がそう言つとやつは俺に近づいてきてこう言った。

「お前が偽者だ。この偽者が」

そう言つとやつは俺を突き飛ばして走って逃げて行ってしまった。

「俺が偽者だつて。どういうことだ」

俺は軽いショックを受けていた。俺が偽者だとそんなばかなことあるはずがない。

俺は次の日またやつの仕事場に来てやつの出てくるのを待っていた。やつが出てくると俺は後をつけることにした。やつがどこに住んでいるのか確かめるためだ。

しばらく付いていくとあるビルの中に入っていった。ドアの前には破れた張り紙が張ってあった。どうやら倒産した会社の廃ビルらしかった。中に入ると中は暗くてほとんど何も見えなかった。頼りになるのは窓から零れ出る日の光だけだった。窓の方を見ると誰かが立っているようだった。おれは一瞬ぎょっとしたが声を掛けてみた。「おい！ そこにいるのは誰だ」

返事はなかったがこちらに歩いてくるようだった。体格から見ても男のようだった。日の光で見える所まで来るとそいつが誰だか分かった。そいつはもう一人の俺だった。

「待っていましたよ」

もう一人の俺はそう言った。

「待ってただって」

「ええ。そうです。ついに入れ替わる時が来たんです。君にはずっとここで暮らしてもらうことにします」

そう言うともう一人の俺はこっちに駆け出してきた。敵意を感じた俺はとっさに避けた。

「入れ替わるだってどういうことだ」

「どうもこうもその通りの意味ですよ」

もう一人の俺はさらに俺に対して攻撃を加えようとしてきた。俺は迎え入れることにした。あいつは俺だ。俺なら大したことがないはずだ。案の定もう一人の俺の拳は避けることができた。俺も拳で応戦したが、俺自身の拳も大したことがなかったので避けられてしまった。無益な応戦が繰り返られ両者共々疲れが見えてきた。

「仕方がありませんね。これを使うことにします」

「何をするつもりだ」

もう一人の俺が手を叩くと床が抜けた。俺は落ちていった。

「そこであなたはおとなしくしてくださいね」

俺は今時こんなオチ漫画でも使わねえぞと思いながら意識を失った。俺は日の光で目が覚めた。どうやらうまくベットの上に落ちたらしい。周りを良く見ると誰かの部屋のように見えた。ドアがあったのでそこから出ると廊下に出た。階段を上ったらこのビルの出口が見えた。どうやらさっき落ちたのが地下一階のようなものらしい。

「あらっ。脱出できたぞ」

もうちょっと閉じ込められて壁を叩いたり、不思議な暗号を見つけたり、たまたまそこにあった釘で壁を削ったりなどして脱出したかったのだが俺はあっけなく脱出してしまった。

俺は学校に行くことにした。もう一人の俺はたぶんそこにいるだろうと思ったからだ。学校に着くとちょうど昼休みになりそうな時間だったので少し待ってから乗り込むことにした。昼休みのチャイムがなって俺は乗り込むことにした。教室の中を見るともう一人の俺がクラスメイトと楽しそうに談笑していた。



「岡田め。楽しそうに話しやがってあれは俺じゃねえつつの。友達なら気付けよな」

そう一人ごとをいいつつ乗り込むことにした。

ガラッ ドン

思いつきりドア開けて入った。ものすごい音がして、さすがにみんな振り向いた。

「どうした。源さん。ドア壊れちまうぞ。新しい遊びか」

めがねがトレードマークのクラスメイトが言った。

「あれっ。源さん。あっちで話してなかった？」

黒髪の素敵な女子のクラスメイトが言った。

「うわ。きもっ。源さんが二人いる！？」

二段のり弁を食べていた男子がのりをはがしながら言った。

「きもいとか言っな！」

俺は思わず突っ込んだがそれどころではない。

「おい！ この偽者。他のやつのは盗めても俺の友達の目は盗めないぞ。おい、岡田！ そうだろ？」

俺は岡田に振ってやった。どういう返答をこいつがしてくるか楽しみであったからだ。岡田は一瞬びくつとしたが前髪をさらりと掻き分けて言った。

「ああ。俺には最初からわかっていたさ。こいつが偽者だっていうことに。遅かったじゃないか。俺はお前が来るまで時間を稼いでやったんだぞ。よし。お前たち殺りあうんだ」

岡田は自慢の前髪をさらりとたなびかせて言った。なぜかあいつは俺たちに殺し合いをしろと言った。それよりもアイツは絶対にもう一人の俺が偽者だということは気付いてないだろうと思った。

「何で源ちゃんが二人もいるの？ 私はうれしいけど」

幼なじみのますみちゃんが言った。後半はスルーした。

「それは俺にもわからん。しかし、やつは俺と入れ替わって今俺の代わりになりすましているんだ。おい！ お前なんとか言えよ」

ずっと黙っていたもう一人の俺はため息を吐くと俺に向けてこう言

った。

「もう出てきたなんて意外でしたね。もう少し時間を稼げると思っていたのですが、ここまで来られたら仕方がない。勝負しましょう。おい。岡田あれを持って」

もう一人の俺は岡田にあれを頼んだようだ。

「あれってなんすか」

岡田はあれが分かっていないようだった。

「あれだ。あれさっき話してたろう」

「ああ。あれすね。了解しました」

岡田はあれを持ってきた。見ると卓球のラケットだった。

「これで勝負だ。これで俺が負けたら素直に消えてやろう。俺が勝ったらお前は奈落の底で暮らすんだな」

そう言うともう一人の俺は歩き出していった。俺の意見は聞かないのかよ。仕方なく俺たちは付いていくことにした。

俺たちは体育館で対決することになった。俺は自信に満ち溢れていた。何を隠そう俺は元卓球部だった。マイラケットではないが腕には覚えがあった。

「おし。行くぞ」

俺たちは卓球で対決することになった。

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

アイツなかなかやるな。ものすごいドライブを掛けやがる。

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ  
カッ  
カッ

そうかアイツはもう一人の俺。ということはアイツも俺同様の力を  
持っているはずなんだ。

カッ

カッ

カッ

カッ

「源ちゃん、二人とも頑張つて」

ますみちゃんは俺たちのどちらにも応援していた。二人応援しちゃだ  
めだろ。俺を応援してくれよ。

カッ

カッカ

カッ

カッ

「もうどつちでもいいや。早く終わってくれ」

岡田は投げやりだった。これが終わったら俺がアイツを奈落に突き  
落としてやるからな。

緊迫した攻防が永遠と続いていった。実力が均衡していたのでな  
かなか決着がつかなかった。最初は見守っていたギャラリーも今は  
少なくなり、今では一人もいなくなっていた。そして、俺は勝った。  
もう一人の俺に勝ったのだ。すなわち今の俺は俺自身を越えたのだ。  
やつは消えながらこう言った。

「シェークハンドにすればよかった……」

それ以来他のドッペルゲンガーの目撃情報もなくなった。どうや  
らこの前のやつが元のようなものだったみたいだ。俺の生活に平和  
が戻ったのであった。

学校ではこの間の俺対俺の卓球対決が話題になっているようだっ  
た。

「いやー。あん時あいつが二人になってきもかったなあ」

「あのマジ対決の卓球正直笑えねって」

「私は源ちゃんが二人いてうれしかったのになあ。なんで消えちゃ

たんだろ。また戻って来ないかなあ」

廊下や教室でわさわさと噂話が聞こえてきた。俺には変なものを見る目が向けられてきた。

「ねえねえ。また戻って来るよね。もう一人の源ちゃん。今度はホームラン対決とかどうかな？ 源ちゃん野球上手だったでしょ。きつとまた勝てるよ」

ますみちゃんは勝手なことを言っ一人で盛り上がっていた。頼むからもう戻ってこないでくれ。

俺は正直俺の方が消えればよかったかなと少し思っていた。その後俺がホームラン対決をすることはなかった。ますみちゃんが残念がっていたけれど。

## （後書き）

ご拝読ありがとうございました。今回はドッペルゲンガーということで投稿させていただきました。コメントなどいただけるとうれしいです。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2170g/>

---

ドッペル源さん

2011年1月5日03時32分発行